慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『寓話選』：ある日本生まれの版（II）： ジャン=ピエール・クラリス・ド・フロリアン
Sub Title	Fable choisies, illustrées par des artistes japonais（II）: Jean-Pierre Claris de Florian
Author	高山, 晶(Takayama, Aki)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2001
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 No.33 (2001. 9) ,p.49- 75
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20010930-0049

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『寓話選』——ある日本生まれの版——

(II) ジャン=ピエール・クラリス・ド・フロリアン

高山　晶

前回述べたように、欧文和装本ラ・フォンテーヌ『寓話選』が1894年（明治27年）に東京市京橋區築地で出版されている[1]。テクストはフランス語で、計28の寓話のすべてに、5人の日本人画家によって描かれた挿絵が付けられ、少なくとも2種類の紙質の異なる版が出版された[2]。そして、翌1895年（明治28年）の7月から10月にかけて、もうひとつの『寓話選』が、同じく東京市京橋區で印刷・発行されている。それはどのような書物だったのか？今回は、ラ・フォンテーヌ『寓話選』と同様に全2巻からなる欧文和装本、フロリアンの『寓話選』をとりあげて検討するとともに、2つの日本生まれの『寓話選』の持っていた意味を考え、これらの書物を編纂、上梓したフランス人、ピエール・バルブトーの足跡も少し拾ってみたい。

本題に入る前に、フロリアンの『寓話集』、『寓話選』の出版について、ごく簡略にふれておく。

ジャン=ピエール・クラリス・ド・フロリアン[3]の『寓話集』初版は1792年に出版されている[4]。この年はバスティーユ襲撃から3年目になる。12月にはルイ16世の裁判が開始され、翌1793年には、ルイ16世の処刑、革命史上最も血なまぐさい衝突と云われるヴァンデの反乱、そして恐怖政治が始まろうとしていた。『寓話集』初版には100の寓話が収められているが、挿絵は巻の一から巻の五まで各巻冒頭の寓話にのみ付けられている。つまり、大きな挿絵は全部で5枚しかなく[5]、しかもそれらを描いた画家の名前はわからない。1668年に出版されたラ・フォンテーヌ『寓話集』の初版には、ほとんどすべ

ての寓話に、計118の挿絵が付けられていて、画家F.ショヴォーの名もよく知られているのとは対照的である。このような、挿絵の少なさと画家の名も知られていないことは、フロリアン『寓話集』初版の出版された年代が、フランス革命さなかの大激動期で、小さな寓話集に付けられる挿絵にまで人々の注意が向かう余裕のなかった時代を物語っているのだろう。例えばここに、初版からは8、9年後になるのだが、AN IX（共和暦9年）に出版された *FABLES DE FLORIAN* があるが、型はin-16（14×9 cm）の小さなもので、紙質も粗く、挿絵は、初版の5枚の挿絵を真似て縮小し、タイトル・ページの向い合わせ（frontispice）1頁にまとめて入れた、質素な書物である[6]。（図版1）このようなフロリアン『寓話選』の出版状況は、19世紀の半ば近くになってヴィクトル・アダンやJ.-J.グランヴィルの挿絵入りの、もっと大型の版[7]が出版される頃まで続いていたようである。

フランス文学史上「寓話集」「寓話選」と云えば、フロリアンは、ラ・フォンテーヌに次ぐものではないかと推測はできる。ではその出版された頻度はどの程度のものだったのか？　フランス国立図書館（BnF）の目録を“florian”“fables”で検索すると、266の書誌（notices）が選択肢として提示されるのに対して、“la fontaine”“fables”では1500件の提示がある。もちろんこれは大変ラフな数字であるし、初版の出版された年がフロリアンよりラ・フォンテーヌの方が120年以上も前であることを考慮に入れる必要があるが、これら2つの「寓話集」「寓話選」の出版された割合を、おおよそはつかむことができるのではないか[8]。このように、知名度、人気という点ではラ・フォンテーヌに大差をつけられているが、サント＝ブーヴがその才能を、「非常に高尚でも、非常に力強くもない。非常に広がりがあるわけでもない。しかし、控え目で、自然で、真摯、そして、陽気で、軽快で、豊かで、心地よく、繊細な…」[9]と形容したフロリアンは、何よりも『寓話集』の作家であり、その寓話は綿々と語り継がれている作品なのだ。なぜなら、1990年代に入っても3つの新しい版が出版されて、「文学×美術」作品として甦っているからである[10]。

さてこの辺で、日本で生まれたフロリアン『寓話選』に入ろう。
まず、この書物のタイトル・ページ（扉）から見てゆく。

FABLES CHOISIES / DE J.-P. CLARIS / DE FLORIAN / ILLUSTRÉES PAR DES ARTISTES / JAPONAIS / SOUS LA DIRECTION / DE / P. BARBOUTAU / TOKIO / LIBRAIRIE MARPON & FLAMMARION / E. FLAMMARION SUCC^{r}. / 26, RUE RACINE, PRÈS L'ODÉON / PARIS

ラ・フォンテーヌ『寓話選』のタイトル・ページとの違いがいくつか見られる。まず題名の表記が、ラ・フォンテーヌのときには *FABLES CHOISIES* ではなく *CHOIX DE FABLES* となっていたこと（ただし、ラ・フォンテーヌ『寓話選』も表紙では *FABLES CHOISIES* となっている）。次に、出版の年号が欠けていること。このことが原因で、奥付には日本語で「明治廿八年」と記されているにもかかわらず、BnF の蔵書目録では「日付なし」(s. d.) の扱いになっている。そして、一番大きな違いは、ラ・フォンテーヌでは、Imprimerie de Tsoukidji-Tokio, S. MAGATA Directeur と東京の編集・発行・印刷者の名前が入っているのに対して、フロリアンのほうは、そのような表記がなく、かわりにパリの LIBRAIRIE MARPON & FLAMMARION の名が住所入りで刷られていることである。

ところで、ラ・フォンテーヌ『寓話選』には少なくとも２種類の、紙質とサイズの異なる版があったが、フロリアン『寓話選』のほうは、少なくとも４種類の紙質やサイズの異なる版が印刷・発行されている。それらの違いを観察してみることにする[11]。

（A）鳥の子紙版　26×35cm.
（B）奉書版　24.5×34cm.
（C）縦長の版　26×20cm.

（D）BnF 所蔵版　20.5×15cm.

（A）と（B）の違いは、紙質と縦横１～２センチのサイズの違いに加えて、（表紙画そのものは同じであるが）表紙画の縁取りの有無にある。（A）には縁取りがあるが（B）にはない。しかし、（A）（B）ともに横に長い版で、目次（寓話と挿絵の順番）は同じである。（A）（B）グループと（C）の間には大きな違いがいくつも見られる。まずサイズが大きく異なる。さらに（A）と（B）は横長なのに対して、（C）は縦長である。（A）（B）はテクストも挿絵も１頁（つまり１枚の紙）に刷られているが、（C）では挿絵が見開き２頁にわたって刷られている。そして、後で詳しくふれるが、表紙画そのものが（A）（B）のグループと（C）では異なっているうえに、（同じ寓話のテクストと挿絵が選ばれていて、数も同じだが）順番が徹底的に違っている。したがって目次も違ってくる。つまり一見したところ、（A）と（B）は同じ本に見えるが、（C）はまるで違う本なのだ。（D）に関しては、残念ながら閲覧できなかったので、BnF の書籍目録[12] から想像する以外に手段がないのだが、サイズから、ちょっと大胆な推測をすると（C）の「縮緬加工」の版だろうか。（C）と（D）のサイズが、ラ・フォンテーヌ『寓話選』の平紙本の版（25×18.5cm.）と縮緬本の版（20×15cm.）に，およそ一致するからである。BnF 目録によれば（D）の紙質は奉書となっている。

前回、この時代に日本で出版された「（広義の）縮緬本＝日本昔噺の横文字再話」という思い込みがあることにふれたが[13]、典型的な、長谷川武次郎の弘文社版「日本昔噺」シリーズは、そのサイズがおよそ15×10cm. でかなり小さいものが多い[14]。それに比べると、ラ・フォンテーヌとフロリアンの『寓話選』（特にフロリアンの（A）（B）の版）は大型の書物である。なお、ラ・フォンテーヌと同様に（A）（B）（C）版すべてが、表紙と挿絵は色摺りで、テクストのページは、ヴィニェット（小さな挿絵）を含めて、墨摺りである。

次に、表紙画の謎解きをしてみたい。

梶田半古の描いたラ・フォンテーヌ『寓話選』の表紙には、人間は一人も登場せず、夥しい数の動物たちが描かれていて、その表紙画が象徴的にこの書物の特徴を語っていた。では、フロリアンではどうなのか？　この問いに答えるには、4種類の版を（A）（B）のグループと（C）に分けて考えなければならない。前述したように、縁取り装飾の有無[15]を除くと（A）と（B）は同じ表紙画なのに対して、（C）にはまるで異なった画が使われているからである。

（A）版第1巻および（B）版第1巻（図版2）

ラ・フォンテーヌと同じく表紙を描いているのは半古である。そこには、子供を含めて16人の人間のイメージしか描かれていない。やや上方中央の「衝立障子」に«*FABLES CHOISIES DE FLORIAN*»と書名が書かれていて、「衝立」のすぐ右側に立って、書名を棒で指している袴姿の人物がいる。この人を除くと、あとはすべてこの巻の挿絵に登場する人物である。右まわりに照合してみよう。IV. LE JEUNE HOMME ET LE VIEILLARDの「若者と老人」、VI. LE ROSSIGNOL ET LE PRINCEの「若君と養育掛」、次の女性二人はII. LA COQUETTE ET L'ABEILLEの「クロエとマルトン」、後姿の黒羽織の男はXIV. LES DEUX CHATSのネコの「主人」、その左手の僧はXII. LE DERVIS[16], LA CORNEILLE ET LE FAUCONの「(イスラムの托鉢）僧」、その上にXI. LE SANGLIER ET LES ROSSIGNOLSの「金持と庭師」、続いてI. L'AVEUGLE ET LE PARALYTIQUEの「目の見えない人と歩けない人」、IX. LE GRILLONの「3人の子供たち」、以上15人である。ここで袴姿の人物にもどろう。この人だけはどう探してもこの巻の挿絵の中には登場していない。この謎は、後でふれる序文の一節にかくされている、と考えることもできる。つまり、黒紋付に袴姿で、衝立障子の書名«*FABLES CHOISIES DE FLORIAN*»を棒で指しているのは、「寓話の作者がフランス人ではなく、日本人であった」[17]と仮定して、半古のイメージした寓話の作者、フロリアンなのかもしれない。がしか

し、この人物は、やはり半古の描いている第2巻 VI. CHARLATAN（図版12）の「香具師」にも似ている。「不思議の妙薬」を売っている香具師は、紋付は着ていないし、袴の柄も微妙に異なるが、薬効の図解を棒で指して見物人に示しているポーズは似通っているところがある。フロリアン？それとも香具師？...（C）版第1巻表紙のユーモアのセンスを見ると、半古はイメージをダブらせて謎かけをし、楽しんでいたのかもしれない、とも思う。

（A）版第2巻および（B）版第2巻（図版3）

画家は久保田桃水に替わるが、人物しか描かれていないことは第1巻と同じである。中央に一人の人物が硯を右に置いて、筆を手に座り、大きな紙の上に«*FABLES DE FLORIAN*»と墨で書いたところだ。この人物は XIII. LE PHILOSOPHE ET LE CHAT-HUANT の友信の挿絵（図版13）に登場する「哲学者」である。書名を墨書きする役に起用された「哲学者」は、テクスト中では、歯に衣を着せぬ物言いのせいで故郷を追われ、（夜でも目が見えるために、他の鳥たちからいじめられている）「フクロウ」に自らの境遇を重ね合わせている人物である。ところで、この『寓話選』に選ばれている寓話には「陽気で軽快」というサント＝ブーヴの指摘にもかかわらず、「人間不信」「厭世観」のただよっているテクストが印象に残る。「訳された」寓話を読んでいた絵師、桃水は原作者フロリアンのイメージを「哲学者」に見ていたのかもしれない。この表紙に描き込まれているのは総計23人、全員この巻の挿絵に描かれている人物である[18]。それにしても桃水はなぜ、友信の挿絵では小さく、後むきにしか描かれていない III. LE LAPIN ET LA SARCELLE（図版10）の「領主」（テクストでは、主人公である「ウサギとマガモ」の敵役）を、目立つ右上に置いたのだろうか。

（A）（B）版1、2巻の表紙画に共通しているのは、「動物づくし」だったラ・フォンテーヌ『寓話選』に対して、今度は徹底して「人物づくし」だということである。1、2巻の表紙には、合計39人の人物が描き込まれている。テクストに動物が登場しないわけでもなく、挿絵にも動物が描かれているのに、表紙には動物の影すらないし、背景はほとんど描かれていない。

もっぱら登場人物の集団肖像画なのだ。これは、成功かどうかは別として、十分にその効果を意識した編集方針の転換である。なお（A）（B）1、2巻とも、フランスの出版社名がタイトル・ページと同様に表紙に刷られている。

（C）版第1巻（図版4）

表紙画は半古が描いている。小豆色に近い茶系の縁取りのなかに、VII. LE SINGE QUI MONTRE LA LANTERNE MAGIQUE のシーンが使われているが、この寓話に付けられた挿絵とは違う画である。幻灯を映して見せているつもりの「サル」、それを見にきた観客はテクストに出てくる動物（イヌ、ネコ、めんどり、七面鳥、ブタ）の他にも、ウサギ、モグラ、猪、トビ（鷹？）、ハト、ナイチンゲール、コオロギ、蜜蜂からフェニックス（らしき鳥）まで、第1巻に登場する動物たちが丹念に描き込んである。そして、「サルの幻灯」の光が、寓話の筋書きでは何も写っていないはずの（「サル」は立派な口上は述べたが、幻灯をつけるのを忘れていた）スクリーン上に«*FABLES CHOISIES DE FLORIAN*»と書名を写し出している。描いた絵師も楽しんだような気のする、見方によっては皮肉たっぷりの表紙なのだ。パリの出版社名も左下に（A）（B）版と同じく刷られている。

（C）版第2巻（図版5）

表紙は桃水画。青灰色の縁取りのなかに、一匹のサルが床の間に立って、書名の書かれた掛け物を広げ、他の2匹がそれを見せている。見物客はやはり動物たち：ウサギ、マガモ、孔雀、ミミズク、ガチョウ、水鳥、ヤマウズラの一家、その他鳥類が多く、計18匹（羽）。パリの出版社名は1巻と同じく入っている。

このように、（C）版第1、2巻の表紙画は、「人物づくし」だった（A）（B）版とは異なり、なんと計35匹（羽）の動物や鳥、昆虫の描かれている「動物づくし」なのである。しかしそこには、ラ・フォンテーヌの表紙画の「動物づくし」とは根本的な違いがある。ラ・フォンテーヌのときには、山や

川を背景にした自然のなかで見られる動物が描かれていた[19]。ところがフロリアン（C）版の表紙の動物たちは、まるで国芳の戯画に出てくる動物たちなのだ。もっともらしい様子で、着物を着て帯を締め、羽織をはおったり、紋付袴姿のものまでいる。そして、背景は日本家屋の室内である。このような、動物たちの徹底した擬人化と、床の間、掛け軸、生け花、襖といった日本的なインテリアが描かれていることで、とても「人間くさい」イメージになっている。ここに、一見正反対に見える、C版表紙の「動物づくし」と（A）（B）版の表紙の「人間づくし」との共通項があって、それは「人間」（のイメージ）である。そして、その背景は「日本の生活情景」[20]。表紙画にはこうした意図が凝縮されて描かれており、このバルブトー版フロリアン『寓話選』の特徴を象徴的に表しているようである。

次に、見返しを見てみると、ナンバー入りの版は鳥の子紙に190部、奉書に200部刷られていて、この部数はラ・フォンテーヌの場合よりも合計で40部多い。

> EXEMPLAIRES DE LUXE / Il a été fait de cet ouvrage un tirage de luxe / de cent quatre-vingt-dix exemplaires / numérotés (N°s 1 à 190) sur le / papier japonais *Tori-noko* [21]

> EXEMPLAIRES DE LUXE / Il a été fait de cet ouvrage un tirage de luxe / de deux cents exemplaires / numérotés (N°s 1 à 200) sur le / papier japonais *Hô-shô* [22]

今度は、奥付を見る。

明治廿八年七月八日　印刷
明治廿八年七月十一日　發行
著作者　　佛國人　馬留武黨　東京市築地居留地五十一番館

發行者　金光正男　仝市麹町區飯田町四丁目廿一番地
印刷者　山本鎌次郎　仝市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舎々員
印刷所　株式會社　秀英舎　仝市京橋區西紺屋町廿六七番地
畫工　狩野友信
　　梶田半古
木版　製文堂

この印刷および発行の日付は、(A)(B)(C) 3種類の版すべてに共通で第1巻のもので、第2巻は、これも3種類の版すべて、印刷は「明治廿八年十月十三日」、発行は「明治廿八年十月十五日」となっている。発行者、印刷者、印刷所ともラ・フォンテーヌのときとは異なる。画工に関しては、ラ・フォンテーヌ『寓話選』の「岡倉秋水、河鍋暁翠、枝貞彦」が抜けて、フロリアン第1巻には引き続き「狩野友信、梶田半古」が協力し、第2巻では、友信と半古に「久保田桃水」が加わって3人になる。

次に序文を読む。第1巻、第2巻ともに序文が付けられている[23]。とくに第1巻の序文からは、ラ・フォンテーヌの序文が書かれたときとは状況の変化のあったことを読みとることができるので、ここに引用しておく。

L'accueil si favorable qu'a rencontré notre publication, la première de ce genre qui ait été faite, des *Fables choisies de La Fontaine* illustrées à la Japonaise par un groupe d'Artistes de Tokio, nous permet d'espérer que les *Fables choisies de Florian* seront également appréciées du Public.

Nous avons été assez heureux pour pouvoir faire exécuter ce travail par deux des Artistes qui nous ont précédemment prêté leur concours: Messieurs *Ka-no Tomo-nobou*, un des représentants de l'école de *Ka-no* fondée par un de ses ancêtres et *Kadji-ta Han-ko,* un des coryphées de l'école réaliste de *Yosai*, ce maître fameux que

l'Empereur actuel autorisa à se nommer *Ni-hon gwa-shi*（日本畫士）c'est-à-dire le Peintre lettré du Japon, (il fut le premier à qui semblable honneur ait été décerné). Ces artistes dont le talent est très apprécié de leurs compatriotes ont bien voulu, avant de se mettre à l'œuvre, se pénétrer de l'esprit de ces fables, qui ont été traduites en Japonais pour la circonstance, de sorte que ces illustrations représentent réellement des scènes de la vie au Japon aussi bien que si le fabuliste, au lieu d'être Français, eût été Japonais.

Nous sommes heureux de rendre au talent de ces Artistes l'hommage qu'il mérite et que le Public s'est empressé de reconnaître dans notre première publication. Nous espérons que celle-ci, où les deux artistes, aussi bien que les graveurs et imprimeurs, se sont surpassés, sera également bien accueillie, et qu'elle contribuera, ne serait-ce que dans une faible mesure, à populariser, chez nous, l'art si intéressant de la peinture et du dessin japonais, dont les grands mérites ne sont connus encore que d'un petit nombre de personnes favorisées.

この序文の要点を以下に記してみる。

第１段落：この種のものとしては初めての出版物である、ラ・フォンテーヌ『寓話選』が好評であったこと。フロリアン『寓話選』も同じく高い評価を受けることへの期待。

第２段落：ラ・フォンテーヌとフロリアンの両方に挿絵を描いている、狩野友信、梶田半古がかなり詳しく紹介されている。その後に、「その才能が同国人（日本人）から高く評価されているこれらの絵師が、寓話の作者（フロリアン）がフランス人ではなく日本人であったのと同じくらい巧みに、ありのままに日本の生活情景を挿絵に表現できるように、わざわざ日本語に訳されたこれらの寓話の精神を、仕事に取りかかる前に、深く理解してくれた」とある[24]。

ここに、「挿絵を付ける日本人画家に、寓話の意味を理解してもらうのが

多かれ少なかれ困難であった」という主旨の記述のあった、ラ・フォンテーヌ『寓話選』の序文[25]との大きな違いがある。今回は、寓話のテクストがこの出版のために「日本語に訳されて」いたので、画家は挿絵を描く前に寓話の意味を良く理解していた、わけである。ということは、フロリアン『寓話選』の寓話の選定は事前になされていたことになり、ラ・フォンテーヌ序文の、河鍋暁翠が「カラスとキツネ」の挿絵を描くことを「選んだ」という記述とは出版状況が変化していた、と考えることができるのではないか。ラ・フォンテーヌのときにも、すでに寓話の選定はあらかじめ決まっていて、限られた選択肢の中から「選んだ」のなら、この「暁翠の選択」という記述を深読みすることは避けるべきであるが、ラ・フォンテーヌにつけられた序文の第1段落には寓話の選択そのものへの迷い（主として挿絵画家に寓話の意味を識ってもらうことの困難さに由来する迷い）を読み取ることができるだけに、「最初の試み」[25]であったラ・フォンテーヌ出版時から僅かおよそ1年後にすぎないのだが、状況の変化が感じられる序文である。この変化にはフランスの出版社も関係していたかもしれない。ラ・フォンテーヌには見られなかったタイトル・ページ上のフランスの出版社名 “LIBRAIRIE MARPON & FLAMMARION” の記載も考慮に入れると、「最初の試み」が好評だったことで、フランスの出版社が乗り出してきたとしても不思議ではない。「日本の生活情景をリアルに表現した挿絵」を入れるようにという要望がMARPON & FLAMMARION から出されたのかもしれないし、後述するように「著作者　佛國人　馬留武黨」自身がラ・フォンテーヌ『寓話選』の「動物づくし」を行き詰まりと感じて、「人間」イメージの復権を計ったこともあるかもしれない。2冊目の『寓話選』を目新しいものにする必要もあっただろう。それには「日本の生活情景」はフランスの読者・挿絵鑑賞者を惹き付けるには打ってつけの小道具である。

第3段落：2人の絵師が、彫師と摺師も含めて、前作（ラ・フォンテーヌ『寓話選』）に優るとも劣らない才能を見せているこの出版物も、同様に好評に迎えられて、フランスではまだごく少数の恵まれた人々にしかその真価が知られていない、日本の絵画芸術を広めるために、この本の出版が少しでも

役に立つことを期待している、と結ばれている。ラ・フォンテーヌ序文にもあったように、フランスで日本の絵画を紹介することが出版の目的のようだ。

なお、この序文の書かれた場所、日付は記されていない。

次に、目次で、このフロリアン『寓話選』のために選ばれている寓話と、挿絵を付けた画家の名を見てみよう。

TABLES DES FABLES CONTENUES DANS CE VOLUME

(PREMIÈRE SÉRIE)

I..... L'AVEUGLE ET LE PARALYTIQUE. Illustrée par *Ka-no Tomo-nobou*.

II.... LA COQUETTE ET L'ABEILLE. Illustrée par *Kadji-ta Han-ko*.

III... LE CHAT ET LE MIROIR. Illustrée par *Kadji-ta Han-ko*.

IV.... LE JEUNE HOMME ET LE VIEILLARD. Illustrée par *Ka-no Tomo-nobou*.

V..... LA TAUPE ET LES LAPINS. Illustrée par *Kadji-ta Han-ko*.

VI.... LE ROSSIGNOL ET LE PRINCE. Illustrée par *Ka-no Tomo-nobou*.

VII... LE SINGE QUI MONTRE LA LANTERNE MAGIQUE. Illustrée par *Kadji-ta Han-ko*.

VIII.. LA CARPE ET LES CARPILLONS. Illustrée par *Kadji-ta Han-ko*.

IX.... LE GRILLON. Illustrée par *Kadji-ta Han-ko*.

X..... LE PHÉNIX. Illustrée par *Ka-no Tomo-nobou*.

XI.... LE SANGLIER ET LES ROSSIGNOLS. Illustrée par *Kadji-ta Han-ko*.

XII... LE DERVIS [16], LA CORNEILLE ET LE FAUCON. Illustrée par *Ka-no Tomo-nobou*.

XIII.. LE MILAN ET LE PIGEON. Illustrée par *Ka-no Tomo-nobou*.

XIV... LES DEUX CHATS. Illustrée par *Kadji-ta Han-ko*.

(DEUXIÈME SÉRIE)

I..... LES DEUX CHAUVES. Illustrée par *Kadji-ta Han-ko*.

II....　L'ENFANT ET LE MIROIR. Illustrée par *Kou-bo-ta To-soui*.

III...　LE LAPIN ET LA SARCELLE. Illustrée par *Ka-no Tomo-nobou*.

IV....　LES DEUX PAYSANS ET LE NUAGE. Illustrée par *Kadji-ta Han-ko*.

V.....　LE HIBOU ET LE PIGEON. Illustrée par *Ka-no Tomo-nobou*.

VI....　LE CHARLATAN. Illustrée par *Kadji-ta Han-ko*.

VII...　L'AVARE ET SON FILS. Illustrée par *Kou-bo-ta To-soui*.

VIII..　LE PAON, LES DEUX OISONS ET LE PLONGEON. Illustrée par *Ka-no Tomo-nobou*.

IX....　LES DEUX VOYAGEURS. Illustrée par *Kou-bo-ta To-soui*.

X.....　LES ENFANTS ET LES PERDREAUX. Illustrée par *Kou-bo-ta To-soui*.

XI....　LE PAYSAN ET LA RIVIÈRE. Illustrée par *Ka-no Tomo-nobou*.

XII...　LE VIEUX ARBRE ET LE JARDINIER. Illustrée par *Kou-bo-ta To-soui*.

XIII..　LE PHILOSOPHE ET LE CHAT-HUANT. Illustrée par *Ka-no Tomo-nobou*.

XIV...　LA GUENON, LE SINGE ET LA NOIX. Illustrée par *Kadji-ta Han-ko*.

ここに挙げたのは（A）（B）版の目次である。前に述べたように、同じ寓話が同じ数だけ選ばれているのだが、（C）版では順番が大幅に入れ替っている[26]。

さて、日本版に選ばれた、これらの寓話にはどのような傾向があるのだろうか。表紙画の「人間づくし」を手がかりに、目次に人間が登場する割合を見てみる。勿論、目次のタイトルとテクストの内容は常に一致しているわけではないが、おおよその傾向、特徴を摑むことはできると考えられる。フロリアンの「寓話集」には110から112の寓話が収められている版が多いが[27]、これら「寓話集」の目次には、ジュピター、ヘラクレスなど神々も含めると「人間」は約40%の割合で登場している[28]。この数字はラ・フォンテーヌ「寓話集」とほぼ同じであるが、日本版ラ・フォンテーヌ『寓話選』に選ばれた

28の寓話のタイトルには「人間」の登場は皆無であった[29]。では、日本版フロリアンではどうなのか。第1巻は14分の5、つまり35.7%、第2巻では14分の10、71.4%となり、平均で53.6%となる。ラ・フォンテーヌのときとは一転して、「人間」へのこだわりが、日本版フロリアン『寓話選』の寓話の選択には見られるのである。このような傾向は、第1巻序文の第2段落後半にあった、「日本生活の情景をありのままに挿絵に表現する」という一節とも表裏一体をなしている。たしかに、テクストに動物しか登場しない寓話でも、動物を擬人化して描けば一事実、第1巻 VII.「幻灯を見せるサル」と（C）版表紙画では擬人化されている一人間のイメージ以上に「人間くさい」イメージをつくることは不可能ではない。しかし、自然のなかに動物だけが登場するような寓話では「日本の生活情景」を描くのはちょっと難しい。絵師にそのような挿絵を描いてもらうためには、やはり人間の登場する寓話を選ぶことが必要だったのだろう。

では、実際に描かれた挿絵では「人間」と「日本の生活情景」のイメージはどのように扱われているのか？この2つの要素を挿絵の中に拾ってみる。

第1巻

I. 少々日本風というよりオリエンタル調かと思われる部分もあるが、「目の見えない人と歩けない人」を中心に街路が描かれ、9人の通行人もバラエティに富んでいて「生活情景」のひとこま、と言えるだろう。

II. クロエとマルトン、つまり「浮気女」とその侍女が日本髪を結って、花柄や矢絣の和服を着ている。舞台は和室で、襖絵、鏡台、小引き出し、小函など丹念に描かれていて、「人間」「日本生活情景」ともたっぷりと堪能できる。一方の主人公であるはずの「ミツバチ」（動物イメージ）は捜さないと見つからないくらい小さい。（図版6）

III. 鏡台に上って鏡につめを立てる「ネコ」。人間はいないし、動物の擬人化もないが、「日本生活情景」はある。鏡台に描かれた漆絵の風景は日本的な水辺の景色や梅の花で、障子、床の間の掛け軸と生け花、そこに置かれている小函の木目にいたるまで描かれている。

IV.「若者と老人」は袴姿で日本庭園に立っている。灯籠や松の枝ぶり、秋の花々、遠景の城など「日本情景」。

V.「人間」なし。「生活情景」なし。

VI.「若君」とお庭番は烏帽子をかぶった、公家のような服装。動物イメージの「ナイチンゲール」は梅に鶯（メジロ）という日本的なモティーフのなかに小さく描き込まれている。

VII.「人間」のイメージはないが、徹底した擬人化が見られる。人間のサル真似をして幻灯機をあやつるサルは紋付を着て、見物する動物たちも全員着物を着ている。日本版フロリアン1、2巻を通じて、挿絵の動物が服を着ている唯一の例である。前述したように、この挿絵のテーマが増幅されて、（C）版第1巻の表紙画に使われている。（図版7）

VIII.「人間」なし。「生活情景」なし。

IX. タイトルは「コオロギ」であるが、テクストに出てくる、蝶を追いかける子供たちが挿絵には大きく登場。子供たちの着ている着物の柄が、細かく三人三様に描かれていて「日本生活情景」にもなる。動物イメージのコオロギは草叢に小さく描いてある。

X.「人間」なし。「生活情景」なし。

XI. タイトルは「猪とナイチンゲール」だが、テクストに出てくる「人間」2人は和服を着た金持と庭師として登場。「生活情景」はとくになし。

XII. 僧が一人。しいて挙げれば、遠景の藁葺きの民家が「日本生活情景」か。

XIII.「人間」なし。「生活情景」なし。

XIV.「2匹のネコ」のテクストは終始、兄弟ネコの対話で、人間は直接は登場しない。挿絵では、ネコのイメージ自体は擬人化されてもいないし、服も着ていない。が、ネコの主人とその日常生活情景がクローズアップされ、微細に描写されている。和室に座った主人はお膳を前に食事中。箸で何やらつまんで、今にもゴマスリの上手な太った兄貴ネコにえさをやるところ。一方、窓から見える瓦屋根の上では痩せた弟ネコがネズミを追いかけている。室内には火鉢が置かれ、女性がお給仕をしていて、床の間、掛け物、襖絵ま

で小道具も揃っていて、挿絵が「日本生活情景」を背景に、「人物」イメージに焦点を移動した典型的な例である[30]。(図版８、９)

このように、第１巻では目次に人間の登場する割合は平均より少なかったが、III. LE CHAT ET LE MIROIR, IX. LE GRILLON, XI. LE SANGLIER ET LES ROSSIGNOLS そして特に XIV. LES DEUX CHATS のように、タイトルは動物でも、挿絵には「人間」が「日本的な生活情景」のなかに描き込まれているケースがかなりある。日本版ラ・フォンテーヌに多く見られた、自然の中に動物のイメージのみの挿絵は４枚（V., VIII., X., XIII.）だけである。

第２巻

I. 象牙の櫛を取り合って、つかみ合いのけんかをしている和服姿の「２人の禿頭」。テクストでは、櫛は«dans un coin»(片隅に、目立たないところに）とあるだけで、場所の特定はないのだが、シーンは和室に設定して、文机の上には手箱や和綴じの手帳が置かれている。

II.「子供」や母親の着物の柄、鏡台、床の間、布袋様の掛け軸、生け花等、第１巻の「ネコと鏡」に似たモチーフである。タイトルが「子供」でも「ネコ」でも、「鏡」をきっかけにして「日本の生活情景」を描き出していることがわかる。

III.「ウサギとマガモ」は擬人化されてはいない。日本的な景色のなか、５人の狩人たちが１日目の殺戮を終えて、殺したウサギを棒にぶらさげて引き上げていく。遠くに城と松、前景に紅葉、夕日が沈もうとしている。５人の狩人のひとりは、この庭園の持ち主の領主で、（A）（B）版第２巻の表紙画に扇子をかざしている人物である。(図版10) なお、この寓話のテーマは初版の、タイトル・ページと向い合わせの口絵（frontispice）でフロリアンの肖像の下に小さく入れられているが、描かれているのは主人公の動物たちだけで人間はいない。(図版11)

IV.「ふたりの農夫」は手ぬぐいをかむったり、肩にかけたり、わらじをはいていたり、「日本の生活情景」のひとこまになっている。

V.「人間」なし。「生活情景」なし。

VI.「香具師」は（A）（B）版第1巻の表紙で、書名を指している人物にちょっと似ている。シーンは橋の上（テクストでは«sur le Pont-Neuf»）で、（A）（B）版では左頁のヴィニェットに太鼓橋を描いて場面設定をしてある。わざわざゴザを敷いてその上に机を置き、「不思議の妙薬」を売っている香具師の出で立ちは、袴に白足袋。20人以上いる老若男女の野次馬の描写も細かい。パリのポン=ヌフ（橋）の光景を「日本情景」にすると、こんな風になるようだ。（図版12）

VII.「吝嗇家と息子」そして息子の友だち2人。「人物」イメージには事欠かないし、室内の様子、登場人物の服装も「日本の生活情景」である。

VIII.「人間」なし。「生活情景」なし。

IX.「ふたりの旅人」も追剝ぎたちも、「日本生活の情景」のひとつかもしれない。

X.「子供たち」と父親の農夫、左上に日本の農家。「人物」と「日本生活情景」の2点が忠実に描かれている。（C）版第2巻表紙画とは異なり、ヤマウズラは擬人化されていない。

XI. テクストでは«la Seine»という設定の河のほとりに腰をおろして、キセルをふかしている「百姓」も、散歩をしながら対話をしている「友人と私」も、遠くの家並みも、そこに「生活」のにおいはないが「日本の風景」ではある。

XII. 斧を手にしている「庭師」、さりげなく置いてある木の桶、日本の農家の風景。「人物」「生活情景」を充たしている。

XIII. 友信の描く「哲学者」は靴をはいて、服装も日本的というよりも、オリエンタルな雰囲気である。「日本の情景か？」と問われると、肯定するには、なにか違和感を感じる挿絵になっている。「ジャポニスムはオリエンタリズムの延長線上の現象」[31]であれば当然のことかもしれないが、この種のブレのあまり見られない書物なので、余計気になるのであろう。桃水は（A）（B）版第2巻の表紙画で、この「哲学者」を中央に置き、書名を墨で書かせている。第1巻の表紙画に半古の描いた「香具師に似た人物」のように、もしも桃水が、友信画の「哲学者」に寓話の作者の役を与えていたとす

るならば、日本人絵師から見て「異国情緒」を感じさせる人物像なので、かえって原作者フロリアンのイメージに重ねやすかったのかもしれない。(図版13)

XIV.「人間」なし。「生活情景」なし。

第2巻では、タイトルに「人間」の登場しない寓話は、14のうち4つあったが、挿絵では3枚(V., VIII., XIV.)のみである。

これまで見てきたように、フロリアン『寓話選』には1、2巻を通して「人間づくし」の傾向が色濃く見られる。テクストに人間がほとんど登場しない寓話であっても、挿絵には人間のイメージが大きく描かれている場合さえある。そしてその背景には、序文にあったように「日本の生活情景」が意図的に描き込まれていた。ラ・フォンテーヌの、主として自然を背景にした「動物づくし」とは全面的にテーマが変わってしまっているのだ。

明治時代に出版された欧文草双紙(いわゆる、広義の「縮緬本」)は、「日本昔噺」シリーズに代表されるように、日本(あるいは東洋)のテクストを英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語などに翻訳し、そこに日本の絵師が挿絵を付けているものが多い。しかし、ラ・フォンテーヌとフロリアンの『寓話選』の場合、フランス文学の古典的なテクストをそのまま持ってきて、そこに日本人の絵師が挿絵を描いている。「異色の一例」[32]とされる所以であろう。しかし、たとえテクストが「日本もの」あるいは「オリエンタルもの」の西欧言語訳でなくとも、日本の絵師が挿絵を付けたこのような書物が上梓されたこと自体、19世紀後半の「ジャポニスム」現象のひとつの表れであることは否定できないであろう。ラ・フォンテーヌにおいてもフロリアンにおいても、第1巻「序文」の最終段落には、日本の絵画芸術を紹介し、広めることが出版の目的である、との主旨が謳われていたが、書物全体を「文学×美術」作品として、ブック・アートの分野におけるジャポニスムの一例と捉えることができるかもしれない。

そして、イメージの領域にジャポニスムの種類といったものがありうるとしたら、この2つの『寓話選』は結果としてかなり異なった種類のジャポニ

スムになっている。ヨーロッパ絵画で伝統的にヒエラルキーの高いイメージであった「人間」のイメージ[33]が極端に希薄になっているラ・フォンテーヌ『寓話選』は、日本人絵師の裁量にかなりの程度まかせておいたらそうなってしまった（のではないか、と推測できる）「無意識のジャポニスム」、あるいは、ヒエラルキーの低い動物や自然は言語を持たないから「沈黙のジャポニスム」の書物とでも呼びたくなる風情を持っている。これに対してフロリアンの方は、タイトル・ページから東京の編集・発行・印刷者名が消えて、パリの出版社名が刷られていることにも表れているが、わざわざ「人間」イメージを登場させて「日本の生活情景」という小道具を描き込んだ「意識され、演出されたジャポニスム」「能弁なジャポニスム」である。そしてさらに、もしジャポニスムに濃度があるとしたら、明らかにラ・フォンテーヌの方が濃密である。la crise de l'homme[34]、「人間イメージの消失」が、そこでは何気なく、音もなく進行してしまうのであるから。一方フロリアンの方は、人間が登場して一生懸命説明をしている程度の濃度である。言語化しないと気が済まない、という文化を感じさせる書物になっている。このような濃度の差も感じさせる２つの『寓話選』である。

ところで、明治27年、28年頃に、フランス語テクストの書物が日本で出版される場合、編纂者は大きな裁定権を持つことになっただろう。フランスの出版社の意向はそれなりにあったにちがいないが、日本はとにかく遠く、意志の疎通もままならぬ相手である。「馬留武黨」の場合、奥付に「著作者」（Traduction de la formalité では Auteur de la Publication）と記されているのは、もしかすると一種の誤解の産物で、良くわからないままにそのまま印刷されてしまったのかもしれないが、バルブトーの果した役割はたんなる編纂者というより、プロデューサーのようなものだったのではないか。『寓話選』を制作中の彼の住所は「京橋區築地居留地五十一番館」となっている。現在の中央区明石町のあたりにあった居留地からは、ラ・フォンテーヌの印刷をした東京築地活版製造所の所在地、京橋區築地二丁目十七（現在の中央区築地１丁目、祝橋の近く）は、簡単に歩いて行ける距離にある。フロリア

ンの印刷を行なった秀英舎も京橋區西紺屋町廿六七番地（現在の中央区銀座4丁目、数寄屋橋近辺）にあって、築地居留地から遠くない。このプロデューサーが、頻繁に至近距離から、これらの書物の工程を、彫りや刷りから装丁・製本に至るまで監督し、それぞれに紙質やサイズを変化させて、多様な作品に仕上げていたことは想像がつく。しかし、日本語がある程度できたとしても[35]、ラ・フォンテーヌ序文にあったように、意志の疎通にはやはり困難が伴っていたのであるから、バルブトーが、はじめから意図してこれらの出版物の2つの相反する傾向を決めていた、とはちょっと考えにくい。むしろ、「最初の試み」であったラ・フォンテーヌ『寓話選』が、結果として徹底した「動物づくし」になったことで、「東の方角」「ジャポニスムの方角」に向かって、行き着くところまで辿り着いてしまって、フロリアンのときにはそこから先は引き返す以外に道がなかったのではないか、とも思う。引き返すこと（「人間」イメージの復活）への一抹の躊躇から生まれたのが、フロリアン（C）版の表紙画に見られる動物の擬人化、「動物」イメージと「人間」イメージの折衷案、妥協だったのかもしれない。

しかしもうひとつ考えられる。「動物」イメージと「人間」イメージを対立項とみなせば、たしかにふたつの『寓話選』は対極にある出版物であるが、これらの書物をひとつのペアと考えると、そこには、ある調和を見い出すことができる。「最初の試み」（ラ・フォンテーヌ『寓話選』）に欠けていたものを「第二の試み」（フロリアン『寓話選』）が補って完成した、ということである。欠けていたもの、それは「人間」のイメージであり、「人」が描かれるときには、その人々の生活の情景も描かれることになる。ところで、これらの書物のテクストと挿絵の出会いを演出した人物、ピエール・バルブトーは日本美術の蒐集をしていた[36]。1886年の初来日の目的は判然としないが、少なくとも、日本に来てからは、蒐集家になったらしい。彼のコレクションは後に、パリとアムステルダムで5、6回売立てが行なわれている。1893年にもコレクションの小さなカタログ[37]が出版されているが、1904年に出版された、2巻からなる分厚い大型カタログ[38]だけでも、計1380点の記載がある大コレクションだったようだ。つまり、日本版ラ・フォンテーヌ『寓話選』

とフロリアン『寓話選』は、蒐集家のプロデュースした書物なのだ。その中に「イメージのコレクション」があったとしても不思議はないだろう。ラ・フォンテーヌとフロリアンの寓話をテーマにした、日本の絵師たちによるイメージのコレクション。表紙画の「動物づくし」と「人物づくし」はそのコレクションのカタログ。「佛國人　馬留武黨」の演出によって、日本で生まれたこれらの美しい『寓話選』は、そんな書物ではなかったのだろうか。

ピエール・バルブトーに関する情報については、多くは見つからないが、稿を改めたい。今回は、前号に載せたバルブトーの「死亡証書」に、生年月日等訂正すべき箇所が判明したので、Gironde 県 Saint-Seurin-sur-l'Isle の町長、M. Marcel BERTHOME のご好意で提供された「出生証書」[39]（図版14）のみを載せておく。

註

1. *CHOIX DE FABLES / DE / LA FONTAINE / ILLUSTRÉES PAR UN GROUPE* / DES / *MEILLEURS ARTISTES / DE TOKIO.* / sous la direction / de / P. BARBOUTAU. / TOKIO / M DCCC XCIV. / Imprimerie de Tsoukidji-Tokio, / S. MAGATA, Directeur.
2. 本誌32号 pp. 103-124.
3. (1755-1794)
4. *Fables de M. de Florian*, Paris : impr. de P. Didot l'aîné, 1792. in-8⁰, 204 p. この版の他に in-12の版もある。

   ただし、BnF の catalogue によれば、初版の出版される12年前の1780年に Bibliothèque pour cinq francs... というシリーズの一冊に *Cinquante Fables choisies de La Fontaine, Florian et autres*, Paris, A. Rion, (s. d.) が出版されている。初版以前にいくつかの寓話がフロリアンのものとして印刷されていたようだ。
5. La Fable et la Vérité (LIVRE I, FABLE 1), La Mère, l'Enfant et les Sarigues (LIVRE II, FABLE 1), Les Singes et le Léopard (LIVRE III, FABLE 1), Le Savant et le Fermier (LIVRE IV, FABLE 1), Le Berger et le Rossignol (LIVRE V, FABLE 1) これら5つの寓話は、ここでとりあげる日本版フロリアン『寓話選』には入っていない。

   その他初版にはfrontispiceのフロリアンの肖像画の下にLe Lapin et la

Sarcelle (LIVRE IV, FABLE 13) の挿絵が小さく横長に入っている（図版11)。

6. DE L'IMPRIMERIE DE GUILLEMINET, A PARIS, A LA LIBRAIRIE ÉCONOMIQUE, rue de la Harpe, no 117. AN IX.（共和暦9年は1800年あるいは1801年にあたる）

7. *Fables de Florian* illustrées par Victor Adam, Paris, Delloye, Desmé et Cie, 1838. (24×15cm.) *Fables de Florian*; (suivies de) Tobie; (et de) Ruth: poëmes tirés de l'Écriture sainte, illustrées par J.-J. Grandville, Paris, J.-J. Dubochet, 1842. (23.5×15cm.)

8. BnF の notices の件数を知名度、人気度のバロメーターにするのは少々乱暴かもしれないが、敢えて数字を出すと次のようになる。2001年現在で、ラ・フォンテーヌは初版（1668年）から333年になる。1500件の notices を単純に年数で割るとラ・フォンテーヌは年に約4.5となる。フロリアンの場合は266件の notices の数を初版からの年数209で割ると、年に約1.27となる。

9. Nous tâcherons [...], d'apprécier à sa valeur ce talent qui ne fut ni très élevé, ni très énergique, ni très étentu, mais qui fut modeste, naturel, sincère, et qui se montra gai, vif, fertile, agréable, et fin, lorsqu'il osa être tout entier lui-même, et qu'il ne sortit pas de ses justes emplois. (Sainte-Beuve, *Les Grands Écrivains Français, XVIIIe siècle, Auteurs dramatiques et Poètes, Beaumarchais, Florian, André Chénier*, Paris, Garnier frères, 1930, p. 67)

10. *Fables complètes,* illustrées par Bertall, Étoile-sur-Rhône, N.Gauvin, 1991. *Fables de Florian*, illustrées par Roland Sabatier, Sceaux, Sceaux communication événement, 1994. *Les Fables de Florian*, éd. établie, annotée et commentée par Jean-Noël Pascal, Perpignan, Presses universitaires de Perpignan, 1995.

11. サイズに関しては、すべておおよその数値。とくに、この時代の和装本は1冊毎にサイズが多少違っていることがある。

12. RES P-YE-1187, 16-YE-4836
Notice complète
Type: texte imprimé, monographie
Auteur(s): Florian, Jean-Pierre Claris de
Titre(s): Fables choisies de J. P. Claris de Florian. Illustrées par des artistes japonais sous la direction de P. Barboutau [Texte imprimé]
Publication: Tokio; Paris, E. Flammarion;(Tokio, impr. de Shueisha) (s. d.).

2 vol. in-16(205×150), fig. en noir et en coul., pl. et couv. en coul. [Don 1845-64] -XcP-. 1918.
Note(s): Ex. sur papier japonais hô-shô. -La couv. du 1er vol. est lacérée
Notice no : FRBNF32112919

13. 本誌32号 pp. 106-107.
14. ただし、同じく長谷川武次郎の発行・印刷でも Karl Florenz 翻訳・監修の縮緬加工本：*Dichtergrüsse aus dem Osten*（明治27年）や *Terakoya und Asagao*（明治33年）などは、およそ20×15cm. で、ラ・フォンテーヌ縮緬本の版、およびフロリアン（D）のサイズとほぼ一致する。
15. （A）版には、第1巻は青灰色に獅子と唐草模様の縁取り、第2巻には小豆色の地にリスに似た動物とブドウ模様の縁取りが付けられている。
16. dervis = derviche（*Trésor de la Langue française*, Paris, éd. du CNRS, 1978, tome 6, p. 1226）
17. 序文第2段落 p. 58.
18. 扇子を手に笠をかぶった一番目立つ右上の人物から始めて、右まわりに特定してみる。まず、この目立つ人は III. LE LAPIN ET LA SARCELLE の「領主」で、この人物の前に座っている、2人の子供ともう一人の子供及びその後の男は VII. L'AVARE ET SON FILS の「吝嗇家とその息子、そして息子の2人の友だち」、II. L'ENFANT ET LE MIROIR の「母親と子供」、つづく3人の男は XI. LE PAYSAN ET LA RIVIÈRE の「友人と私と百姓」、斧を左に置いているのが XII. LE VIEUX ARBRE ET LE JARDINIER の「庭師」、IV. LES DEUX PAYSANS ET LE NUAGE の「2人の百姓」、IX. LES DEUX VOYAGEURS の「追剝ぎ、リュバン、トマ」、その後に棒を持って立っているのは VI. LE CHARLATAN の「香具師」、I. LES DEUX CHAUVES の「2人の禿頭」、そして X. LES ENFANTS ET LES PERDREAUX の「子供たちと農場主」、以上23人である。
19. 例外がひとつある：LA CIGALE ET LA FOURMI の挿絵では「アリ」が日本風の家の中で「どてら（丹前）」のようなものを着ている。
20. p. 58.
21. （B）奉書版の見返し
22. （A）鳥の子紙版、及び（C）版の見返し
23. 序文中では Public, Artistes, à la Japonaise, en Japonais など大文字が多用されている。

第2巻の序文は、この巻のみに挿絵を描いている久保田桃水の紹介が主な目的である。

Pour l'illustration de cette deuxième série de *FABLES CHOISIES DE FLORIAN*, nous avons eu la bonne fortune de pouvoir adjoindre à nos précédents collaborateurs un artiste des plus distingués. A côté des pages signées *Ka-no Tomo-nobou, Kadji-ta Han-ko*, les amateurs remarqueront les cinq compositions non moins délicates de Mr *Kou-bo-ta To-soui* : LES DEUX VOYAGEURS, L'ENFANT ET LE MIROIR, L'AVARE ET SON FILS, LES ENFANTS ET LES PERDREAUX, LE VIEUX ARBRE ET LE JARDINIER.

Kou-bo-ta To-soui appartient à l'école de *O-kio* (école de *Shi-djo*) en ce sens que son éducation artistique fut dirigée par les descendants directs de ce maître illustre. Toutefois les talents de cette valeur ne sauraient demeurer prisonniers d'une formule, ou d'une école. La personnalité de l'artiste s'est affirmée dans ces œuvres qui ont depuis longtemps signalé *Kou-bo-ta To-soui* à l'attention de ses compatriotes. Il sera, nous l'espérons, apprécié de même en France.

24. この一節は、de sorte que 以下の従属節の動詞 représentent を接続法と考えるか直説法と考えるかによって、que 以下が「目的」を表しているのか、「結果」なのか解釈が別れる。もしも直説法と取れば、以下のようになるだろう：「その才能が同国人から高い評価を得ているこれらの絵師は、仕事にとりかかる前に、このためにわざわざ日本語に訳されたこれらの寓話の精神を深く理解してくれた。（その結果）寓話作家がフランス人ではなく日本人であったのと同じように巧みに、ありのままに日本の生活情景が挿絵に表現された。」
後述するように、いくつかの挿絵には、日本の日常生活の場面が細かい点にいたるまで、リアルに描かれているのは事実である。

25. 本誌32号 p. 108.

26. （A）（B）の版を基準にして（C）版の目次をカッコ内に挙げておく。
(PREMIÈRE SÉRIE) I (I), II (II), III (III), IV (XIV), V (VIII), VI (IX), VII (VII), VIII (IV), IX (V), X (VI), XI (XI), XII (XII), XIII (X), XIV (XIII).
(DEUXIÈME SÉRIE) I (XIII), II (VIII), III (IV), IV (I), V (IX), VI (III), VII (XIV), VIII (II), IX (X), X (VII), XI (VI), XII (XII), XIII (XI), XIV (V).
このような寓話の順不同は、奥付の印刷・発行日付は同じであるにもかからわず、（A）（B）版が（C）よりも先に出された可能性を示唆している。なぜなら、（A）（B）は紙面が広いので、左頁にテクスト、右頁に挿絵と入れ

ることができるが、紙面スペースの小さい（C）版では、短い寓話は1頁ですむが、フランス語のテクスト部分が長いと2頁にわたってしまうので、「テクスト2頁、挿絵2頁、テクスト2頁、挿絵4頁、テクスト4頁、挿絵4頁、テクスト2頁...」という風に、テクストの長さに応じて配分を考える必要にせまられるのである。（A）（B）版が先なら（C）を制作するときに上記のような紙面割り当ての制約にぶつかり、調整が必要になるが、もし（C）のコンセプトが先にあったのなら、紙面に特に制約ない（A）（B）版の目次は（C）と同じになっていたにちがいないからである。
なお（A）（B）（C）ともフランスで通常出版されている版の寓話の順と比べて著しく順不同である。

27. Ses fables ne sont pas très nombreuses, bien que, d'après les lettres de Boissy d'Anglas à Mme de Vimeux, certaines aient circulé dès 1788 : elles sont au nombre de cent douze, divisées en cinq livres. Douze fables ont paru après sa mort, dont dix publiées en 1802 par Jauffret, et deux (*l'Aigle et la Fourmi, les deux Sœurs*) dans le tome IV des œuvres inédites recueillies par Pixérécourt (1824). Elles ont été réparties arbitrairement dans les cinq livres. (Pierre Chambry, *Florian, Fables choisies*, Paris, Larousse, 1935, p. 7)

28. 大文字で書くと神の名になりうるもの（ex. la Mort =死神）は「人間」イメージに含めたが、擬人化のみのもの（ex. la Fable et la Vérité）は含んでいない。

29. 本誌32号 pp. 111-113.

30. J.-J. Grandville の描いた Les deux Chats の挿絵は実に風刺が効いている。グランヴィルの2匹のネコは擬人化されて、服を着ている。痩せた弟ネコは、ネズミを串刺しにした棒を携え、MORT AUX RATS（ネズミどもに死を）と標語の書いてある箱を背中にぶらさげて忙しく働いている雰囲気。一方、でっぷりと太った兄ネコのほうは肘掛椅子にすわって、LE RENTIER JOURNAL（金利生活者ジャーナル）紙を読んでいるのだ（Paris, J.-J. Dubochet, 1842, II.-9)。このように、グランヴィルはその挿絵で「動物」イメージの徹底的な擬人化をしているが、半古の画のように、ネコの主人（「人物」イメージ）を前面に押し出したりはしていない。さらに Victor Adam (Paris, Delloyé, Desmé et Cie, 1838, II.-9) の挿絵になると、擬人化すらされず、「動物」そのもの、ただのヤセネコと太ったネコである（図版9）。

31. 稲賀繁美『絵画の東方—オリエンタリズムからジャポニスムへ』名古屋大学出版会、1999、p. 4.

32. 本誌32号 p. 119 註9.
33. 馬淵明子『ジャポニスム—幻想の日本』ブリュッケ、1997、pp. 24-25.
34. A.-M. Bassy, *Les Fables de La Fontaine, Quatre siècles d'illustration*, Paris, Promodis, 1986, p. 132-136.
35. Yorodzou O-da, Introduction, in Pierre Barboutau, *Les peintres populaires du Japon,* Paris, chez l'auteur, 1914, tome 1er.
36. 「死亡証書」では antiquaire（古美術商）となっている。（本誌32号、p. 124、図版12）
37. *Catalogue descriptif d'une collection d'objets d'art, rapportés de son voyage au Japon, par Pierre Barboutau,* Paris, chez l'auteur, 1893.
38. Pierre Barboutau, *Biographies des artistes japonais dont les œuvres figurent dans la Collection Pierre Barboutau,* Paris, chez S. Bing, 22, rue de Provence, 19, rue Chauchat / chez l'auteur, 70, rue Saint-Louis-en-l'Ile, MCMIV.
39. 「出生証書」(acte de naissance)（図版14）

「死亡証書」（本誌32号、pp. 123-124 註25）との相違点を以下にあげる。

		「死亡証書」	→	「出生証書」
（1）	生年月日	1862年4月27日	→	1862年5月27日
（2）	母親の姓名	Marie Peyroudes	→	Marie Peyrondet
（3）	父親の姓名	Dominique Barboutau	→	Dominique Barbouteau

ただし、父親の姓の綴りに関しては、両親の「婚姻証書」(acte de mariage)（1870年6月18日）で Barboutau とされていて、ピエール・バルブトーは一貫して Barboutau を使っている。

「出生証書」の判読については、Michèle Laforge, Paul et Henriette Ingrand 諸氏のご協力をいただいた。紙面を借りて感謝したい。なお、この時代の証書類に、綴り等種々の間違いや矛盾点があるのはめずらしくない、とのことである。

Du 27 Mai 1862

N° 16

Barbouteau
pierre

Du vingt sept mai mil huit cent
soixante deux à huit heures du matin,
Acte de naissance de pierre
Barbouteau, né ce matin fils ⋀ de
Dominique Barbouteau, charpentier,
âgé de vingt-trois ans et de Marie
Peyrondet, sans profession, âgée de vingt-
deux ans, non mariés, et demeurant au

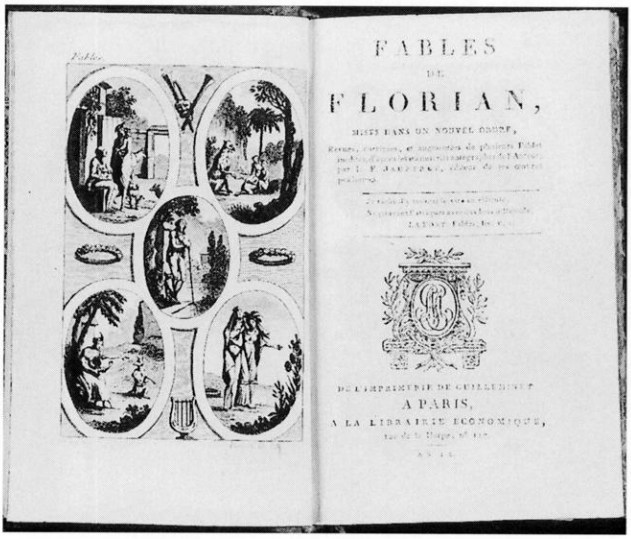
⁂ Naturel
Albouy
Lalièvre
Barbouteau
W. Jackson

Pierre Barbouteau
légitimé par mariage
de Dominique Barbouteau
et de Marie Peyrondet
mariés à La Mairie
de Reuilly paris
le 18 juin mil huit
cent soixante dix.
Le Maire
Formely(?)

Bourg de la présente commune de St-Seurin sur l'Isle.
Le sexe de l'enfant a été reconnu être Masculin. Témoins, Jean-pierre Albouy, instituteur, âgé de quarante huit ans et Louis Lalièvre boulanger âgé de trente neuf ans, demeurant, l'un et l'autre, au sus dit Bourg de St. Seurin.
Sur la réquisition(?) et présentation à nous faite par le dit Dominique Barbouteau, lequel s'est déclaré père de l'enfant et a signé avec nous et les témoins, le tout après lecture faite, Constaté, suivant la loi par moi William Jackson, Maire, faisant les fonctions d'officier public de l'état civil.

St Seurin-sur-l'Isle le deux août 1870

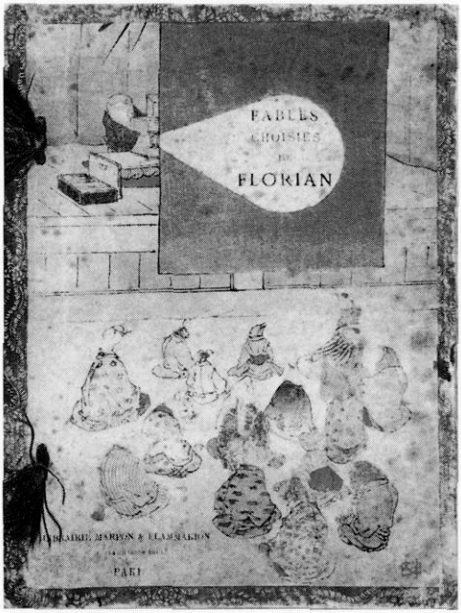
Albouy　Lalièvre　Barbouteau
W. Jackson



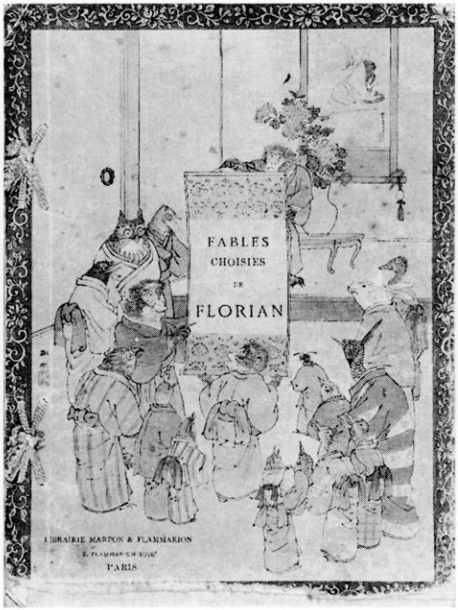
図版１　AN IX（共和歴９年＝1800あるいは1801年）版
frontispice とタイトル・ページ

図版２　表紙（B）版第１巻

図版 3　表紙（B）版第 2 巻

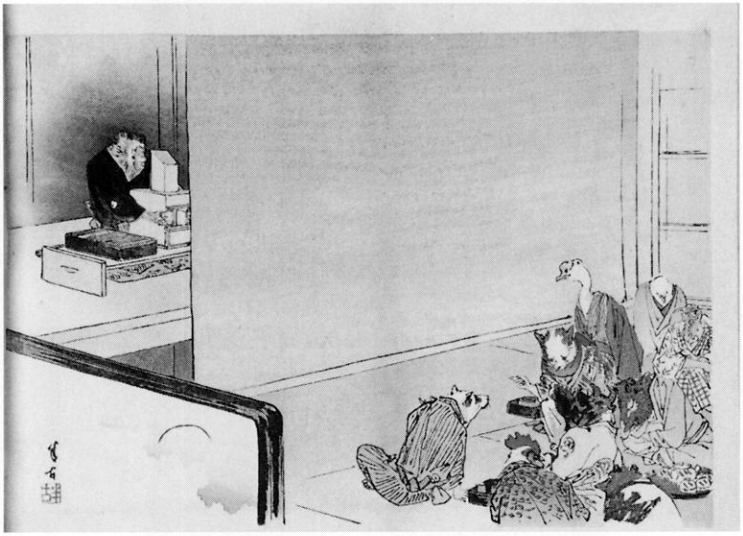


図版 4　表紙（C）版第 1 巻

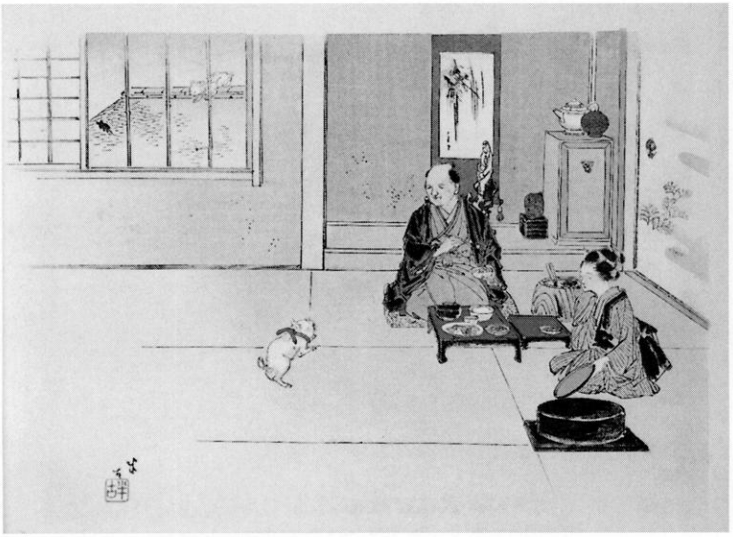


図版５　表紙（C）版第２巻

図版６　LA COQUETTE ET L'ABEILLE 「浮気女とミツバチ」

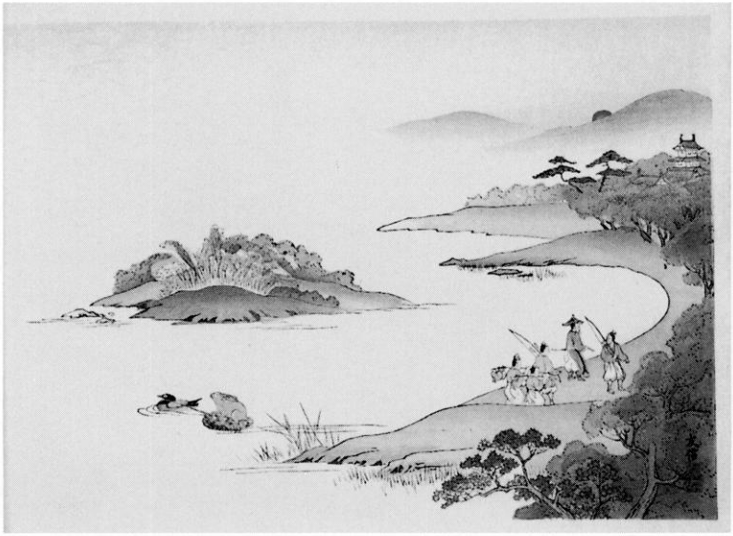


図版 7　LE SINGE QUI MONTRE LA LANTERNE MAGIQUE 「幻灯を見せるサル」

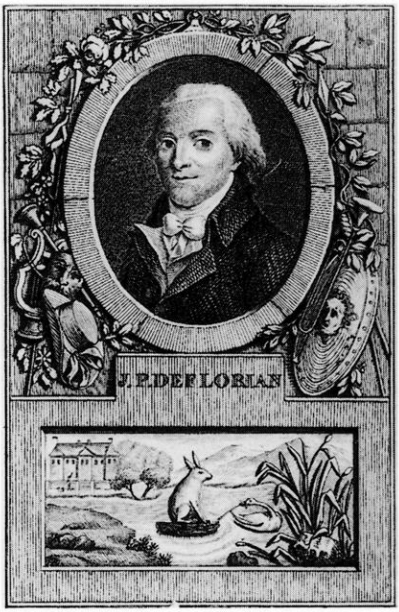


図版 8　LES DEUX CHATS 「二匹のネコ」

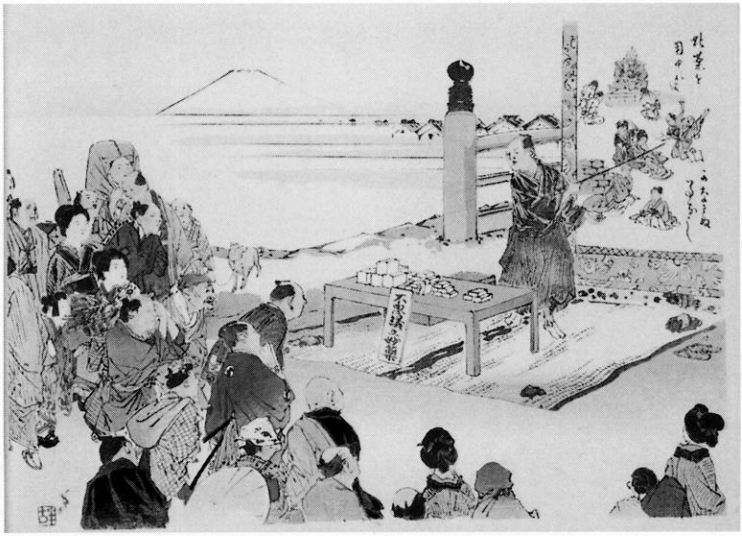
図版９　ヴィクトル・アダン挿絵　LES DEUX CHATS 「二匹のネコ」



図版10　LE LAPIN ET LA SARCELLE 「ウサギとマガモ」



図版11　初版（1792年）frontispice



図版12　LE CHARLATAN 「香具師」

図版13　LE PHILOSOPHE ET LE CHAT-HUANT 「哲学者とフクロウ」

Copie certifiée conforme
à l'original
LIBOURNE-L'ISLE, le 6/10/1960
p/ Le Maire,
(Gironde)

Du 27 Mai 1862
N° 16
Barbouteau
prénom
Acte de naissance de prénom Barbouteau

Du vingt sept mai mil huit cent soixante deux à huit heures du matin,
Acte de naissance de prénom Barbouteau, ni circoncis, fils de Dominique Barbouteau, charpentier, âgé de vingt trois ans et de Marie Peyrondet, sans profession, âgée de vingt deux ans, non mariés, et demeurant au Bourg de la présente commune de St. Cesaire sur l'isle,
Le sexe d'enfant a été reconnu être Masculin. Témoins, Jean prénom Albouy, instituteur, âgé de quarante huit ans et Louis Laliède boulanger âgé de trente neuf ans, demeurant, l'un et l'autre, au dit Bourg de St. Cesaire,
Sur la réquisition et présentation à nous faite par le dit Dominique Barbouteau, lecture faite du présent acte et interpellation aux père et les témoins, le tout après lecture faite,
Constaté, suivant la loi, par moi Hilaire Jackson, maire, faisant les fonctions d'officier public de l'état civil
Albouy Laliède Barbouteau
H. Jackson

Prénom Barbouteau légitimé par mariage de Dominique Barbouteau et de Marie Peyrondet mariés à la commune de Renilly (Marne) le 18 juin 1867 tout transcrit aujourd'hui
Le maire
Formule
Bergeron Pierre Dupuy
Août 1870 —

図版14　P. バルブトーの出生証書